

拡張性病変における血栓形成が疑われた。

3 反復性心室頻拍発作に対してアミオダロンが有効であったが間質性肺炎の合併にて他剤への変更を余儀なくされた鬱血性心不全の1例

田川 実・中村 裕一・佐伯 牧彦*
佐藤 政仁**

長岡中央総合病院内科
さえき内科*
立川総合病院循環器科**

症例は84歳男性。56歳時より鬱血性心不全、拡張型心筋症疑いで近医通院加療を受けていたが、2004年5月7日動悸と呼吸困難を認め、同院受診。心電図上心室頻発(VT)の頻発を認め、当院救急外来搬送された。当院等到着時も依然10数連のNSVT(LBBB type, CL=400ms)が頻発しており、塩酸ニフェカランの静脈内投与が発作抑制に有効で、同剤の持続点滴下に当科入院した。入院時の胸部X-P上心拡大(CTR=61%)と誤嚥性肺炎の合併を認め、心臓超音波検査で左室径の拡大(LVEDd=6.2cm)と下壁を中心にびまん性の著明な壁運動の低下(EF=19%)を認めたため、抗生剤の投与と心不全の治療を開始するとともに、アミオダロンの内服治療(200mg/day)より開始した。一時VT頻回発作による意識レベルの低下を認めたが、一時ペースメーカー治療(100bpm)とアミオダロンの増量(400mg/day)でVTの発作頻度の軽快とともに症状改善し、同剤の減量後(200mg/day)もHolter心電図で3連以上NSVTを認めなくなった。高齢で腎機能低下も認め(Ccr=30ml/min)、心臓カテーテル検査は行わず6月13日当科退院した。しかし、2004年7月20日頃から呼吸困難が出現し、胸部X-P上両肺にすりガラス様陰影を認め7月24日当科再入院。アミオダロンによる間質性肺炎が疑われ、同剤を中止後肺陰影は次第に改善したが、数連のNSVTを再び認めるようになり、dl-ソタロールの少量投与(40mg/day)を開始した。徐脈傾向を認めたが、NSVTの頻度の改善を認め、入院中に明らかになった大腸癌に対する手術後に

2004年11月6日当院退院した。反復性心室頻拍に対しアミオダロンが有効であったが、間質性肺炎の合併を認め中止を余儀なくされた症例で、高齢で腎機能低下と誤嚥性肺炎を合併し治療に難渋した症例である。症例の検討も含め報告する。

4 ステロイド療法が肺高血圧症に著効した Crow-Fukase 病の1症例

小村 悟・倉崎 桃里・和泉 大輔
畑田 勝治・古嶋 博司・大倉 裕二
八木沢久美子・埴 晴雄・小玉 誠
相澤 義房・高木 正仁*・小澤鉄太郎*
西澤 正豊*

新潟大学第一内科
同 神経内科*

Crow-Fukase病は、Polyneuropathy, Organomegaly, Endocrinopathy, M protein, Skin changesを5徴とし、それぞれの頭文字をとってPOEMS症候群とも呼ばれている。病態は完全に解明されていないが、炎症性サイトカイン(IL-1 β , IL-6, TNF α)やVEGF(vascular endothelial growth factor)などの過剰産生が原因と推定され、特にVEGFによる血管新生、血管内皮増殖、血管透過性の亢進が原因の中心的役割をなしていると考えられている。それらの産生には形質細胞腫が指摘されている。予後は比較的良好とされるが、5-25%に合併する肺高血圧症(PH)を認める症例は予後不良とされる。PH合併POEMS症候群は、治療による各種サイトカインの低下によりPHが改善する症例が報告されている。

本症例は、PH増悪による右心不全および血管透過性の亢進による著明な胸水の増加により心不全で入院となった。ステロイド増量後にVEGFは552pg/mlから472pg/mlに減少し、平均肺動脈圧は37mmHgから25mmHgに低下、胸水の消失も認めた稀な症例と考えられるので報告します。